

●秋岡芳夫さんと置戸町の出会い

昭和55年、社会教育活動に力を入れていた町は、暮らしの中に木の文化を取り入れ、生産教育を通して地域の暮らしや文化、人づくり、新しい産業を興す取り組みを総合的に行うまちづくりの展開を考えました。毎月18日を「木に親しむ日」として木工教室を行い、図書館で木に関する専用書架を開設、町内に木製遊具を造るなど木をテーマとした取り組みを盛んに行いました。

昭和57年には、地域の産物を利用した加工技術の研究開発と生活文化の普及を目的とした地域産業開発センターを開設。その頃、木工技術を学ぶため図書館の蔵書を読んでいるうちに、秋岡芳夫さんの著書との出会いがありました。偶然にも秋岡さんのお父さんが図書館関係者と繋がりをもつことがわかり、当時、社会教育課長（図書館長、地域産業開発センター所長兼務）だった故澤田正春さんが東京へ赴き、熱心に講演を依頼。昭和58年度第5回町民憲章推進大会の講師として来町しました。講演後、秋岡さんの講演に感銘を受けた青年木工グループとの懇談会で、「木工ロクロを導入した器づくり」の提案を受けたことをきっかけに、秋岡さんの紹介で時松辰夫さんによる木工ロクロの技術指導がスタートしました。

町民にとって身近だったエゾマツ、トドマツ。そのなかでも建築材などの一般製材としては不向きとされ、薪やチップ材としてしか利用されていなかったアテ材（偏心成長した部分）から、見事な加工技術で生み出された美しい木目をもつ木の器が、のちに秋岡さんによって「オケクラフト」と名付けられ、全国に紹介されました。

オケクラフトは、町内外から大きな反響を呼び、オケクラフトの生産者育成、学校給食器、料理研



オケクラフトの器で給食を食べる子どもたち

究、「おけとワイン」、「しろ花豆焼酎」などおけとのまちづくりに多大な影響を与えました。

●クラフトパーク計画と「どま工房」

秋岡さんとの話し合いから、町は「地域の資源である森林や農産物の質の向上、付加価値のある地域産業を育成するとともに工芸的な考え方に基づくまちづくり」を進めました。平成6年に「クラフトパーク実施計画」を策定し、共同工房、どま工房建設など計画の一部が実施されました。

どま工房は、秋岡さんの工芸村構想のデザイン画をもとに設計されました。「どま」とは、近隣の人々が集い、いろいろな生活の知恵や技などを伝えながら、モノづくりができる場でもありました。そんな知恵と技の伝承を研究分析し、活用することを目的として「どま工房」が誕生したのです。

●託された「秋岡コレクション」

秋岡さんは、妻の芳子夫人やデザイナーなどとともに置戸を何度も訪れ、交流を深めるとともに、まちづくりの方向性を示唆しました。また、「収集した資料を置戸に譲ってもいいよ」と話し、一部の資料を置戸に持ち込んで、広く公開しました。置戸のまちづくりに大きく貢献した秋岡さんは、平成9年4月18日、多くの人々に惜しまれながら76歳の生涯を閉じました。その後、ご遺族からの申し出があり、秋岡さんが半生をかけて日本各地で収集した生活用具や大工道具をはじめとした手仕事道具、自身の木製作品や関連書籍など貴重な資料18,000点が町に寄贈されることとなりました。翌年、秋岡さんの事務所スタッフであった増田倫子さんが研究員として置戸に移り住み、資料の調査・研究が進められました。

資料1点ごとに使い道、製作地、年代、材質などを丹念に調べて整理分類する活動は、9年間に及びました。当時、インターネットもなく、文献を探しながら進めた地道な活動は、資料集発行や企画展示などの礎となりました。その後、平成19年から高橋佳子研究員、平成25年から那珂琴絵研究員へと受け継がれています。資料集は、平成19年度の「^{かん}鉦」からはじまり、今年度の「秋岡作品 竹とんぼ」で最終刊を迎え、全28集となりました。